ＭＯＴＨＥＲとともに歩んだシモキタの３０年

平成１８年１１月２０日

原告　山﨑千鶴子

１　はじめに

私は、この訴訟の原告の一人で山﨑千鶴子と申します。

私は、下北沢で３５年間、お店をやっており、「ＭＯＴＨＥＲ」と「ｍｏｔｈｅｒ’ｓ　ＲＵＩＮ」という２つのロックバーを経営しています。

また、私は、下北沢でお店を始めてからずっと下北沢に住んでいます。最初は、大原１丁目に住み、その後、北沢４丁目、代田２丁目に住み、現在は代田５丁目に住んでいます。

２　ＭＯＴＨＥＲ　－　母なる土地シモキタ

私が、下北沢でロックバー「ＭＯＴＨＥＲ」を始めたのは１９７２年のことでした。

当時私は、音楽が聞けて、気楽に楽しめるお店を作りたいと思い、小田急線沿線で物件を探しました。

下北沢以外の街でもいくつか物件を見ましたが、下北沢の街を見たときにちょうどいい物件に出会い、「ここでお店をやりたい」と思いました。小さな路地でできた、こじんまりとした街の雰囲気が、私がやりたいと思っていた店のイメージにぴったりだったからです。

そういうわけで、ＭＯＴＨＥＲは、下北沢だからこそ生まれた店だと思いますし、下北沢は、私の店にとっては文字通り、母なる土地だと思います。

３　７０年代のシモキタ

ＭＯＴＨＥＲには、近隣の大学の学生さんや近くに住む若い人たちがお客さんと

して来てくれました。また、芸能関係の人もよく来てくれました。

下北沢は、文化の街と言われていますが、私の店でも、普段からあたり前のようにお客さん同士が、自分たちの活動や芸術について語り合っていました。下北沢でさまざまな文化が育っていったのは、日常的にこうした人と人の交流があったからだと思います（写真資料１）。

４　８０年代　－　バブルでも変わらなかったシモキタ

１９８０年代になると、それまで数多くあった南口の風俗店の数も少なくなり、下北沢が「若者の街」としてマスコミなどにも取り上げられるようになりました。

当時は、いわゆるバブル経済で景気がよく、お客さんの数も多かった時代です。

東京の他の場所では、地上げが行われたり、強引な土地の取引が行われたりして社会問題になっていましたが、下北沢では、いわゆる地上げというものは聞いたことがありませんでした。

そのせいか、下北沢の街並みは、私が店を始めた７０年代から、８０年代、９０年代と時代が移っても変わりませんでした。大きな建物は少なく、比較的細い通りに面したお店は、それぞれ趣向をこらして特徴のある店作りを続けていました。

これは、とても珍しいことだと思いますし、たいへん貴重なことだと思います（写真資料２）。

５　店の中の小さなシモキタ

下北沢は、いまや全国的にも「シモキタ」として有名になりましたが、このように下北沢が発展したのは、街のつくりと無関係ではないと思います。いや、むしろ下北沢の街のつくりが、私たちのお店作りに大きな影響を与えていると思います。

下北沢には、さまざまな特徴を持つ店がありますが、これは下北沢の街を歩くと、通りごとに、あるいは角を曲がるたびに、変化に富んだ風景が現れるのに似ています。また、下北沢の店では、初めてのお客さん同士が気軽に話を始めて意気投合す

るという場面をよく見ますが、これは、買い物途中の人が、細い通りで立ち話をしている光景と重なります。

店の中には、それぞれの小さなシモキタがあり、ひとつひとつの店がシモキタと一体となって存在していると言ってもいいと思います（写真資料３）。

６　道路ができると困ること

私の実感として、下北沢に大きな道路がないことで困っていることはひとつもありません。街に入ってくる車の数は少ないですがタクシーはある程度走っているので、タクシーはつかまりやすいし、消防署は街の中にあります。環七からも、井の頭通りからも近いので、不便はありません。また、下北沢には小田急線と井の頭線があり、「電車で来る街」というイメージが出来上がっているので、道路が必要だという話はそもそもこれまでありませんでした。

反対に道路ができると困ることがたくさん出てきます。

道路を作るために多くの店が壊され、せっかく長い時間をかけて作られた街並みが台無しになってしまいます。ゆっくりと安心して街を歩いたり、道端で立ち話をしたり、これまで当たり前のこととしてできていたことが、できなくなってしまいます。空気は汚れるし、車の騒音に悩まされるようになります。子供たちにこの街を残すことは私の義務だと思っています。

７　さいごに

下北沢を壊されることは、自分の店を壊されるのと同じくらい悲しいことです。もし、本当にこんなばかげた計画が実行されるなら、お店を閉めてしまいたいとさえ思います。そのくらい私は腹が立っています。

どうか私の大好きな、そして、私の人生の思い出がいっぱいつまった下北沢を壊さないでください（写真資料４）。

以上

１．70 年代中頃のＭＯＴＨＥＲ店内（中央が私)。
個性あふれるお客さんが集まり、毎日のように朝まで語り合った。

２．1953 年から続く、ジャズ喫茶マサコ。
当時から通い続けている人もいるという。

3．工夫を凝らした個性豊かなお店たち。
自分たちが街を作っているという自負をみなさんもっている。

4．MOTHER'S RUIN 店内（2006 年 11 月 17 日）。従業員とともに（中央が私）。